

がきょう
法華經を刻んだ瓦經
『妙法蓮華經』卷第四 法師品第十

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



(裏面)
上饌衆甘美及種種衣服供養是佛子冀得須臾聞
若能於後世受持是經者我遣在人中行於如來事
若於一劫中常懷不善心作色而罵佛獲無量重罪
其有誦誦持是法華經者須臾加惡言其罪復過彼

(表面)
所應瞻奉應以如來供養而供養之當知此人
是大菩薩成就阿耨多羅三藐三菩提三善提哀愍
衆生願生此間廣演分別妙法華經何況盡
能受持種種供養者葉王當知是人自捨清

図1 出土した瓦經と経文(太字が瓦經の刻印部分)

調査地とその周辺 2010年11月から翌年3月にかけて、京都市右京区太秦東蜂岡町うずまさひがしはおおかちょうで、道路の拡幅工事にともなう発掘調査を実施しました。道路は城北街道と呼ばれており、東映太秦映画村の入口に面しています。

調査地は、古墳時代後期から中世の集落遺跡である常盤仲之町とぎわなかのちょう遺跡の東端部にあたります。また、飛鳥時代に秦氏によって創建された広隆寺の旧境内にも隣接します。常盤仲之町遺跡では、これまでに竪穴住居や掘立柱建物が多数検出されています。広隆寺旧境内の南東部では1977年に弁天島経塚(平安時代後期)が調査され、22基の経塚内からは経筒や青白磁合子、経典を記した石(図3)など多数の遺物が出土しています。

2009年度の調査では、平安時代

の建物跡や区画溝、鎌倉時代から室町時代の柱穴群と土坑墓群、さらには、人骨片や焼土・炭が入った火葬場とみられる遺構を検出し、広隆寺旧境内北東における中世の状況がわかってきました。

今回の調査地はこの南に接し、鎌倉時代から室町時代の柱穴・土坑・溝などを検出しました。土坑の中には、焼土・炭・石を含む墓とみられる遺構や、城北街道沿いでは南北溝とその溝に取り付く数条の東西溝を検出しました。南北溝は広隆寺旧境内の東限、東西溝は居住地を区画する溝と考えられます(図2)。

瓦經の出土 これらの東西溝の1つの上面で、内部に数個の石が入った楕円形の土坑を検出しました。大きさは長辺約1m・短辺約0.5m・深さ0.3mあり、平瓦状の破

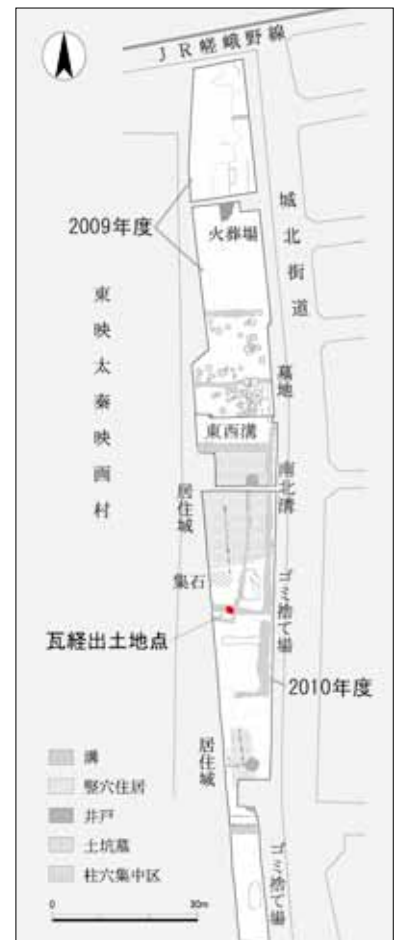


図2 調査区平面図

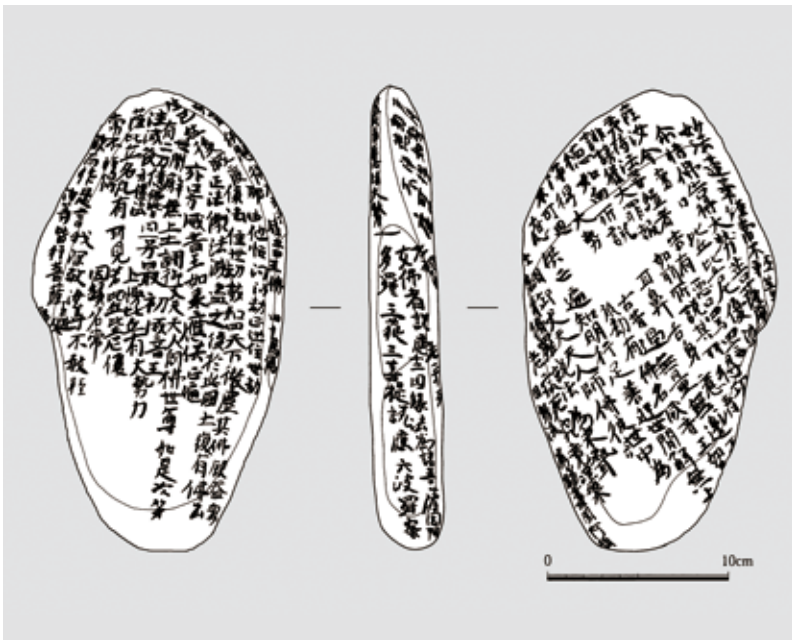


図3 広隆寺旧境内・弁天島経塚出土の経石

扁平な自然石に墨で経文を書いたもので、『妙法蓮華經』卷第七 常不輕菩薩品第二十の最初の部分を写している。

片を取り上げたところ、経文を粘土板に刻んで焼成した瓦経であることがわかりました（図1）。すぐ北の東西溝からは、奈良時代の小型の鏡も出土しており、調査地の周辺にはこれらを納めた経塚が存在したことが想定されます。

瓦経 出土した瓦経片は長さ10.9cm・幅7.0cm・厚さ1.5cmあり、両面とも1.3cmごとに界線が引かれ、その間に経文がびっしりと線彫りされています。内容から完訳が現存する『妙法蓮華經』卷第四法師品第十の一部であることがわかりました。表面は瓦経の右下隅、裏面は左下隅の破片となります。これに欠損する経文を補うと、図1右のようになります。

一行の文字数は、表面は17字または18字、裏面はちょうど20字に復元できます。裏面の文字数が多いのは、この部分が経文の中では韻文形式の「偈」に当たるためです。法華經では各品において「そ

の時世尊^{せそん}は重ねてこの義^ぎを延べんと欲し、偈^のを用いて言たもう」として、五言絶句からなる韻文で説法がくり返されます。瓦経もこの部分は五文字四単位となり、一行20字となったのででしょう。行数は両面ともに15行とみられます。

法華經 『法華經』は、『妙法蓮華經』『妙なる教えの白蓮』とも呼ばれます。現在私たちが目にするものは、5世紀初めの中国で鳩摩羅什^{くまろし}という人物によって翻訳されたもので、日本には飛鳥時代に伝来し、聖徳太子は『法華義疏』という注釈書を著しました。二十八品からなる大乘仏教の中心的な經典で、「諸教の王」として尊ばれました。この中で釈迦^{ひゆ}（世尊・仏）は、様々な譬喩をもって難解な教えを説きます。「釈迦の方便^{ほうべん}」と呼ばれるものです。同じ内容が「偈」をもって繰り返えされるのも特徴です。

瓦経に刻まれている法師品第十は、仏が葉王菩薩^{やくおうぼさつ}に法華經の一偈・



図4 本能小学校跡出土の丸瓦

『妙法蓮華經』が線刻されている。右2行は卷第二 譬喩品第三、左5行は卷第八 妙莊嚴王本事品第二十七の一部である。

一句を敬うことの大切さを説く内容となっています。ここでいう法師は出家した僧侶ではなく法華經の教えを世に弘める人であり、そのための大切な行が「五種法師^{ごしゆほつし}」です。実際の瓦経に彫られた経文の直前には「法華經の一句を受持^{じゆじ}し、読誦し、解説し、書写し、(中略)供養し、合掌し、恭敬すれば」とありますが、ここにある受持、読誦、解説、書写こそが、苦しみに満ちた現世（娑婆）から完全な悟りの世界（阿耨多羅三藐三菩提^{あのくたらさんみやくさんぼだい}）に到達できる具体的な行だというわけです。泥水に咲いた清らかな白蓮に教えを喩えるわけがここにあるのです。

そこでこの瓦経です。最初は粘土板に「書写」されました。それが出土品として「解説」され、皆さんが「読誦」されるわけですから、まさに法華經の教える行そのものでもあるのです。

(加納敬二・丸川義広)